

# 熊本地震を振り返る～あの時の記憶～

※勤務先・所属・役職は発災当時のものになります。



中学時代の仲間と  
役場でボランティア  
活動  
さかもと はると  
阪本 遥人さん  
熊本国府高等学校1年



人々の温かさと  
共助の大切さを実感  
「互いを気遣い、  
助けあつた」  
ひろせ えいじ  
廣瀬 英二さん  
北新山区区長

高校に入学してすぐ、サッカー部の練習から帰宅する途中で地震に遭いました。学校は1ヶ月ほど休校になって自宅待機。部活も休みになり、家でテレビを見ていたら、高校の先輩や同級生がボランティアをしている姿が映りました。そこで自分たちにも何かできるんじゃないかなと思い、中学時代のサッカー部の仲間と声を掛け合って、役場に行ってみたんです。

役場にはトラックやコンテナがいっぱい並んでいました。僕たちは職員の方の指示で各地から届いた支援物資を仕分けして、地域ごとに振り分ける作業をすることに。各地からのボランティアが増えてきて交代するまで、毎日8時から15時ごろまで、1週間ほど続けました。役に立ったかどうかは分かりませんが、自分たちが被災者だからこそ、被災者が求めていた働きができたと思います。

ボランティアの経験もでき、今後、何か起きた時には率先してリーダーシップを發揮したいです。



北新山区は7年前に新山区から分区しており、住宅開発が進む人口増加地区で、区民の約3割は新しく来られた方です。

4月14日の前震時には約1週間、北新山区の公民館を臨時避難所として開けました。「不安な人は来てください」と声を掛けると、ピーク時に約30人、延べ197人が訪れ、身を寄せ合いました。

私は、区内を自転車で巡回し、特に一人暮らしの方や体の不自由な方の安否確認を最優先に行いました。近所の方々の協力もあり、無事安否を確認することができました。

当区では家屋や家財の損壊、車庫の破損など、多くの方が被害を受けており、道路上にはたくさんのがれきが散らばっていました。二次災害を防ぐためにトラックを手配し、区民とともに道路の清掃を行い、災害ごみの回収や搬送も皆で協力して行いました。

当区は平成27年9月に自主防災組織を設立し、定期的に防災訓練を行っています。消防署や消防団の協力もあり、消火器の取り扱い方やホースのつなぎ方、AEDを使った心肺蘇生方法を学んでいます。

地震の時も区民同士が互いに気遣いながら「大丈夫ね」、「食べ物あるね」と声を掛け、食料を分け合いました。防災訓練や日頃の行事を通して、助け合う気持ちが育まれていると思いましたし、人々の温かさや共助の大切さを実感しました。

地震の経験を風化させないためにも、定期的に実施する防災訓練などを通して、災害に対する備えや「自助」、「共助」の大切さを一人一人が認識し、災害に強い地域づくりしていく必要性があると感じました。

炊き出しボランティアを通し、婦人会の存在意義を再確認

さかい めぐみ  
酒井 恵さん  
菊陽町地域婦人会会长



消防団員としての使命感を持って  
さまざまな活動に従事  
ありむら ひでとし  
有村 英敏さん(右)  
菊陽町消防団団長

平成28年4月に団長になったばかりで、26班406人を束ねる責任の重大さを感じていた時に起きた地震でした。前震後、外出先からすぐに役場の災害対策本部に向かい、各地区を見回った分団長からの被害報告を待つことに。

本震後は、自分の住む地区を重視して見回り、午前3時ごろに本部へ。幸いなことに一番心配していた火災が発生せず、死者も出ませんでしたから、消防活動としての出動はありませんでした。以降、消防団員の安否確認を優先し、備蓄品の確保や高齢者の方の安否確認、家屋の被害状況の確認などを行ってきました。夜間は不審者情報が多く、警察に引き継ぐまで地区の見回りをしました。また、本部の指示で、支援物資の搬送、交通整理などにも携わりました。消防団員は皆、使命感を持っているため、やる、のが当たり前。大変だと思うことはありませんでしたし、区民が一体となって片付けを行う中、消防団はなくてはならない存在だと感じました。

今後は、消火活動に加え、人命救助などの訓練も必要だと思っています。また、地震後は年1回、西原村や益城町、大津町の消防団員と意見交換会を開き、消防団としての活動に役立てています。

